心造少女　3

3章

生命の勝利は、それが非生命的環境の圧力に逆らい刃向かって存在することの上に印し記されてきたし、今もそうだ。それは持続持久する生命が宇宙に対して遂行してきた悪魔的計画の数々のゆえではなく、非生命こそが、現存する宇宙の、正常かつ不変の状況であるという、基本的で単純な理由にもとづく。

生命が遭遇するすべての困苦について、この生存のための闘争こそが舞台の中心なのだということを理解するに、偉大な科学も、哲学的考察も宗教的洞察も必要ない。

（パオロ・ソレリ『生態建築論』第一章「美しき肉体」より）

1

昏(くら)い海の水面(みなも)を、強い風が薙いでいる。

それは幾度となく繰り返され、絶え間ない飛沫を作り出す。絶え間ない飛沫はその身を捩りあわせて、やがて小さな波へと形を変える。生まれた波はまた重ね

合わさり、さらに大きな波へと変わる。そしていつしか波は水面の上に、変えがたい流れを作り出す。

それは本来、非生命的環境であるはずの自然がもたらす暴威の一端に他ならない。生命が己が力で海原を進み行く際に、それに逆らおうとするのはとても容易いことではない。

しかし過日の人類は、非生命的環境の手綱である風と波の流れを読み、それに逆らわずして、己が進路を進み行く知恵を編み出した。そうした叡智の数々は、記憶が言葉として伝えられ、記録が文字として刻まれることで、誰もが再現可能な技術となって連綿と継承されてきた。そして技術はやがて文明を育み、都市を築き、人類の繁栄をもたらした。そうして発展し続けた文明は、いつしか風と波の流れに従わずして、思うがままに海原を進み行く術すら身につけた。

すべての生命的存在を生み出した母なる海さえも蹂躙し、制覇するほどの旺盛かつ貪欲な欲望と本能。それはいずれ仰ぎ見る天の底を目指し、遥けき遠き星の彼方すら踏破する未来を待ち望むばかりに見えた。

だがその矛先が星の海へと振りかざされることは、ついぞなかった。そればかりか、待望したその企ての実現は、彼らが思い描いた時期よりも大きく遅滞することとなる。

かような事態を招くこととなった、人類への足枷の出現。

その契機をもたらしたのは、やはり母なる海だった。

夜の海原をゆく、大きな影。

風を切り裂き、波を割り砕きながら進むその正体は、鋼で編まれた一艘の船だ。

大型の建造物、あるいは小型の都市を、そのまま運搬できそうな程に巨大な艦

船。堅牢な印象を与える黒鉄の装甲で守られた甲板部は平たく、あらゆるものが積みこめそうだ。だが、その上には色とりどりの無数のコンテナの代わりに、砂漠に突き立つ一枚岩のように大きく頑丈な液槽（タンク）が、どっしりと鎮座している。

それは化石燃料資源を運搬する役割を担う、ミッドデッキ型の大型液体輸送船（タンカー）だった。その側面には、この船の管理組織を示す山吹色の錨のシンボルと《ＴＬＣ》というイニシャルに組み合わされた艦船のログタイプが月明かりを照り返している。

その外見はまるで要塞。だが、安定した滑走で海上を移動する巨大船の進路、そのすぐ近くで突如、ひときわ大きな水柱が上がる。

それは一度ではない。間欠泉のように二度、三度と立て続けに吹き上がる水柱（スプラッシュ）は、いずれもその船体を容易に超えるほどの高さを持っている。そしてそれが生み出

される為に費やされたエネルギーは、直ちに海面へ突発的な波を作り出した。同心円状に広がる幾重もの波紋。それらが断続的に押し寄せる衝撃は、たとえ大型船であっても巨体を激しく揺さぶられることは避けられない。

「畜生ッ！」

浩然（ハオラン）は何度目かの揺さぶり（シェイク）に耐えられず、よろめいて壁にぶつけた肩を抑えながら、ごく手短に罵り声を上げた。

薄暗く狭い船内では、同様の声がそこかしこで響いていた。いずれも男たちの声だった。この液体輸送船に乗り込んだ、命知らず（レックレスネス）の呼び名をその身に浴びてきた者たち。だが今は、心の底から後悔（レベンテンス）を抱いている者たち。

そもそもだ。浩然は思う。この仕事が絶対に安全ではないということは、何度も言い聞かされてきたし、承知したつもりであったことだった。その脅し（リスク）に見合

うだけの報酬(リターン)を約束され、事実として支給されてきたからこそ、聞き飽きた警告には何度も首を縦に振り、細かな文字で書かれた免責事項を読み飛ばしながら、変わらぬ書類(フォーマット)に幾度となくサインをし続けてきたのだ。

かつてないほどの危険(ハイリスク)に満ちた海原。

その分の大きな価値(ハイリターン)を持つ海上輸送。

輸送船の運行は、その殆どが無人化されている。だが、不測の事態に備えての現場作業員(マニピュレータ)の存在は、たとえネットワークがあらゆる道具(ツール)を常時接続常時監視の状態に置く現代でも、欠かすことができないようだった。

あるいは、完全に無人化された輸送船は、この公共の海上では無防備に放置された宝船(トレジャーシップ)に等しいことを考えれば、不測の事態、——たとえそれが意図されたものであろうとなかろうと、いざ発生したそれの責任所在を証言するには、ネッ

トワーク機器の他に書き換え不可能な存在を、その傍においておく必要があった。

つまり本来の目的からは不必要ながらも、その要請に従って集められたのが、浩然たちのような証言者。他に日々の糧を稼ぐ術を持たない、数合わせの志願者たちだった。

そんな事情は流石の浩然も分かっていたつもりだった。この仕事に必要なのは健康な肉体と度胸だけ、特別な知識も技術も必要ない。最低限、何かが起こった時に証言できるだけの能と、命が残っていさえばいい。そんな簡単な仕事だから、他のあらゆる場所で敗け続けてきた彼が、長らく従事し続けることができたのだった。

だから、まさか自分が――。叫び声をあげる誰もが、きっと同じことを思っている。全く運が悪いにもほどがある、と。確かに、飛行機が墜落するよりは確率

の高い、分が悪い賭けだったかもしれない。けれど、本当に死ぬような目にあうと思ってサインをする人間など、どれだけがいると思うのか。自分だけが勝てると思うからこそ、人間は賭けに乗るものだ。

故に、この絶望的な状況下に置かれて湧き上がるのは生存への悲観ではなく、今までの勝ちへ理不尽かつ一方的な精算に対する、逆上に等しい憤怒だった。

またしても船体が大きく揺れる。今度の水柱は先ほどよりも近い。

だが心に満ちた怒りが、浩然の身体を押しとどめた。近くの安全手すりを、その鍛えられた腕で掴んで身体を支えると、彼は甲板への通路を駆け上がり始める。

非常時に備えて叩き込まれた行動指針（マニュアル）に従って、積み込まれた脱出用の小型ボートの積載されている場所へと走る。少なくとも生き延びることさえできれば、まだ敗北は決まっていなかった。

その途中、通路に嵌め殺しの舷窓から、横目に垣間見えるのは海原の光景だ。月明かりだけでは満足な見通しの立たない非生命的環境の暗闇を、まるで水性のような一筋の光が切り裂いた。しかもそれは天から海ではなく、海から天へと立ち昇ったものだった。

明らかな人工的光源。救いの可能性に、浩然は色めきだって走る速度を上げる。そして最後の階段を駆け上がり、甲板へと飛び出した。

そうして甲板に立ち尽くした彼を、出迎えたもの。

『……』

耳の奥、脳に近い部分を直接擦り上げるようなノイズ。

可聴域のすれすれのところで鳴り響く、サイレンの魔女の悲鳴。

あるいは嘆き女（バンシー）の叫び声。物体を浸透し、振幅する振動。

「――ぁ、」

彼が目にした、一筋の光。

それは確かに自然界ではなく、人工物によるもの、――もっと正確に言えば、人工物を模したものだった。

はじめは鰐のように見えた。

この大型液体輸送船に群がる無数の影。

小型の鯨を超えるサイズの、鯱に似たモノトーンの大型海獣。

波間から垣間見えるその大きな顎は、ボートを一呑みできそうなほどに巨大で、むしろその身体の半分以上はその大口で占められている。

時折イルカ、あるいはトビウオのように飛び出すことで露出する腹には、まるで人を戯画した捻くれた手足のような器官が不規則にぶら下がっている。

燐光を放つその目は魚眼というよりも昆虫に近く、尋常な生物の系統樹には決して該当するものがないことを確信させる無機質さ、異質さを放っている。
深き海の底に棲まう艦、――深海棲艦（アビス・ワン）。
それは純粋な自然の存在ではない。
ましてや、完全な人工の存在でもありえない。
生物と機械。有機物と人工物の複合体（キメラ）。
ひと目見ただけで解る、自然の中にあってはならないカタチの獣。
他の生き物を食う為ではなく、殺す為に殺すことを果たす為の形。
そして、その群れの中心にある姿。
鬼。
『――――――――――――――――――――――――――――――――――――』

異形の中にぽつんと立ち尽くす少女。掃き溜めに鶴を思わせるその場違いさに、一瞬心が奪われかける。

だが目を凝らさずとも解る。異形と同じモノトーンに身を包んだその人型(ひとがた)は、激しく波打つ海面上に立っている。明らかにありえない光景。

その左腕にあたる部位はその半ばからが、周囲を泳ぎ回る異形の頭部を切り落としたものを、そのまま継ぎ接ぎしたような形状の、巨大な兵装を装着している。

そしてその顔にあたる部位に、装着しているのは仮面のようだった。

二本の湾曲した大きな角の生えた仮面。

鬼の面。

『……』

鬼の左腕が光を放つ。それこそ彼が目にした人工の光。だがそれが救いの知ら

せではないことは、もう十分に判りきったことだった。
それを運用するものこそ、この名状し難き叫び声の主。
この大型船を揺さぶる水柱を生み出す異形を率いる者。
甲板から、水平線をこちらへ迫るその群れを目撃した浩然は、先ほどまで自分を奮い立たせてきた燃え盛る火のような感情が、冷水を浴びせかけられたかのように、一瞬にしてかき消えるのを感じ取る。その仮面の下に露出した、可憐な乙女を思わせる口元が浮かべる歪んだ微笑み。それを目にした浩然は単純な事実を理解する。
あれに命乞いなど通用しない。
あれは人の倫理を理解しない。
あれと人との間で、利害の関係は成立しない。

あれは自分たちとは異なる欲求に、根ざした本能で蠢くものだ。

「ぁあ……、あああ……」

そうして呆然と立ち尽くした彼は、その鬼の左腕が、ゆっくりと回頭してこちらへ向けられたことに気がついた。

その左腕に取り付けられた顎の、喉奥からせり出すのは舌ではない。

まだ生き物モドキを取り繕ろうとしている外装部位（テクスチャ）の涙ぐましさを、ぶち壊しにする馬鹿げた構造。きっかり九〇度まで展開した顎から覗くのは、明らかに人工物を模した、ヌラヌラと輝く構造器官。

砲塔。その先端が、昏い孔をこちらに向けている。

あ、という間もなく、その先端が火を噴いた。

射出された砲弾が、スローモーション撮影のように浩然へ、――船体へ向かっ

て、まっすぐに迫りくる。先程までの水柱の正体。この砲弾が幾つも着水したことで、船体を揺らす波が生み出されていた。

だがこれは完全な直撃コースだった。このままでは浩然はおろか、この大型液体輸送船さえも一溜まりもない。砲弾は船体を破砕し、あるいは貫き、漏れ出した化石燃料は容易にその火花に引火し、爆発炎上を引き起こすだろう。

数瞬後に訪れる、避けようのない死。賭けの敗北。一巻の終わり。数え切れないほどの想起が、頭の中をフラッシュバックする。

恐れのあまり目を瞑りかけた刹那。その耳に、飛び込んできた音。

それは、声だった。

「――あああああああああああああああああああああああああああああああああああッ!!」

「……ッ！？」

絶叫。ただし悲鳴ではない。驚く彼の耳に飛び込むその声は、闘争本能に根ざして放たれる鬨の声だ。だが一体何処から――、そう思っている矢先に砲弾は彼の目前へ迫る。その込められた運動エネルギーを存分に放たんとする質量物が音よりも早く飛来する。

打撃音。

目の前を、――そして真上を駆け抜けていく突風。旋風。熱。質量弾が引き連れてきた空気抵抗で生じた摩擦熱が肌の上をなで上げる。続いて破砕音。浩然の背後にあった電探を搭載した観測マストの一部が削り取られて取り付けられていた金属製のはしごが自重に負けて激しい音とともに崩折れる。

「――っ、……」

死の予感が一瞬にして過ぎ去り、力が抜けて尻もちをついた浩然は、いつの間にか止めていた息を吐く。吸う。何が起きたのかを考える。そして理解する。あんぐりとその口を開きながら、目の前で起きた事実を受け入れる。

砲弾が弾き飛ばされた。

「――うぁあッ!!」

再びの飛来音、――そして打撃音。それは彼のすぐ傍で響いた。彼はその音へ振り返る。目を見張る。そこには彼の理解を超えた光景が存在する。

大量に吹き出す蒸気。――蒸気機関車と見紛うほどの噴霧。立ち込める熱気。ゆらゆらと揺れる光景はまるで陽炎(ミラージュ)だ。

そのスクリーンの向こう側。

鳶色の服から伸びたすらりとした長い手足。海風を受けて白波のようにはため

く銀の髪。その頭には小さな帽子。煙突のような形をしたそこからは、実際ひっきりなしに煙が吹き上がる。あたりを包み込む蒸気の正体。そこから垣間見えるのは、先程の鬼にも引けを取らない可憐な乙女そのものの面立ち。白い頬は紅潮していて、その髪や鼻、顎の先からは汗がぽたぽたと垂れていた。

美しい少女。だが明らかにその姿はボロボロだった。両足に履いたソックスとブーツは焼け焦げて元生地の赤色を僅かに垣間見せるのみだった。鳶色のワンピースも裾が破けていて、身を屈めればその艶めかしい素足の付け根が今にも見えそうだ。

『CALLING! CALLING!』

「ぁ……っ、は……っ！」

彼女がその腰元に装着した鋼鉄のハーネス、そこに収まっている鈍色のこけし

のような人形が、警告音を鳴り響かせている。だが少女はその瞳を真っ直ぐに前へ、あの鬼がいる方角へ向けたまま、身体を一度も停止させずに揺り動かし続ける。その足はひたすらに小刻みなステップを繰り返す。

飛来音。

「うああッ!!」

浩然は今度こそ、その一部始終を目の当たりにして、絶句する。

まるで獣のような咆哮をあげる少女。その脚が目にも留まらぬ速度で振り抜かれる。そのなめらかな右足が撓り、美しい弧を描いて正確に、的確に、迫り来る砲弾を迎撃（カウンターヒット）する。

打撃音。

思い出すのはハイスクールでのベースボールの記憶。金属バットで硬球を打ち

抜いた時とそっくりの音が響き渡る。

だが少女が使ったのはバットではない。飛んで来たのも硬球ではない。信じ難い光景に何秒か遅れてようやく追いついた理解。――弾かれた砲弾は全て、この少女が蹴り飛ばしたものだった。

少し離れた場所で吹き上がる水柱。彼女が蹴り飛ばした砲弾。ボレーシュートでまっすぐに打ち返されたそれは遠い波間、――ちょうど群れの中心に当たる場所に着水し、その内部に秘めた運動エネルギーと化学エネルギーを発散した。白い飛沫と強力な波が発生し、次弾を放とうとしていた群れが、その隊列をかき乱されたのが見える。

『CALLING, CALLING!』

再びこけしががなりたてる音を聞いて、放心していた浩然は我に返る。流石に

負荷がかかったのか、少女はステップを止め、脚を抑えて蹲っていた。頭から吹き出す煙もその量が減り、蒸気も薄れかかっている。

『CALLING, PRIORITY ONE!』

「う、うんっ……、え？」

少女が頷き、ついで首を傾げた瞬間、こけしの表面に浮かび上がるスピーカーマーク。

『――この、馬鹿津風』

そして流れ出すのは人の声。

『アンタ、勝手に何やってんのよ。今すぐ降りて戦隊に合流しなさい。四〇秒よ』

それはまた、別の少女の声のようだった。この荒波の中でも盤石な通信が伝えるのは、目の前の熱気を吹き出す少女とは対象的な、冷静で冷徹な、冷ややかさ

をモットーとするような声だった。
「で、でも……っ」
『あと勝手に受信音量下げんな。私の呼びかけを二回も無視したわね』
「だ、だって、砲弾に集中できなかったから……っ」
先程までの唖然とするような機敏な動き、勇猛さは何処へか。少女は見てて気の毒に思わずにはいられない程に、しどろもどろの震えた声で釈明を述べようとする。
『あと二〇秒』
だがその声は一切聞く耳を持たなかった。少女は意気消沈した様子で立ち上がると、足の調子を確かめるようにその場で飛び跳ねた。浩然が認識している限りでも、三度にわたってあの砲弾を真正面から蹴り返したはずの少女の身体は、そ

れでもまだ動き回るに全く支障はないようだった。

『――あと一〇秒。ああ、それと、』

「……？」

『よくやったわね、天(あま)。後でうんと褒めてあげるわ』

「……、うん！」

先程までの意気を再び取り戻した少女は、帽子から蒸気を噴き出しながら手すりの上に飛び乗る。

「ま、待て！」

そしてそのまま海原へと降りようとした少女を、浩然は思わず呼び止めた。驚いて振り返る少女を前にして、自身でも困惑しながら心に浮かんだ言葉を口にする。

「その、ありがとう。Thank you so much. 助かった！」

『――あと三秒』

「うん！　あ、ありがと！」

カウントダウンに追い立てられて、少女は一瞬のはにかむような笑顔を浩然へ残して、海へ飛び降りた。

その背中、まるでスピードスケーターのように波間を自在に滑走していく少女の後ろ姿を、浩然は手すりにしがみつきながら目で追いかける。

「――、内勒德（ネレイド）……」

内勒德。海の女神を意味する言葉。今目の前を去っていった少女、彼らを指し示す言葉。――その正式な名称を艦船少女、あるいは艦娘。

風と波の流れに従わずして、海原を自在に駆ける乙女たち。人が戦うことがで

きない怪物と戦うために、人の代理戦士として、人によって造られた、人の為の人造人間たち。彼らこそ、あの怪物の群れと戦うことを、その存在意義とする者たちである。

勇ましく戦う彼らが、何故美しい少女の姿を象られているのか、浩然は知らなかった。無論、人造人間である以上、男性だろうが女性だろうが、その外見と発揮される力に関係はないことは確かだろう。それは先程の少女がこの上ないやり方で証明してくれた。

しかしことが艦娘に関して言えば、その美しさは見る者の特別な欲望を喚起する為の、ある種の呪いのように施されているように思えて仕方なかった。

艦娘は人類の代理戦争を行うための軍事兵器だが、兵器にかぎらず、工業製品には必ず品質のバラ付きが発生する。そのうち、品質が規定基準に満たないもの

は廃棄の対象となる。そしてその廃棄対象となった艦娘を、非合法に商業的に再利用するビジネスがあることを、浩然は知っている。

それは浩然もその再利用ビジネスの恩恵に授かった経験があるからだった。確かあれは鳥籠のシンボルが印象に残る店だった。艦娘の生まれ故郷であり、浩然が属する組織の取引先である極東の島国では、本来軍事兵器に該当する彼らの目的外転用は無論非合法とされている。

だが一度(ひとたび)海の外に出れば、正規流通のルートから外れた艦娘を取り扱う店は、どこの船着き場にも幾らでも存在するものだった。だから、こうして自分たちを護衛し、救ってくれる女神様たちとの蕩けるようなお楽しみの数々は、彼ら現代の船乗りにとっては特に珍しいことでもない、よくある娯楽の一つだった。

元々この船には、常の例に従って、艦娘による輸送船護衛船団が着いているは

ずだった。いずれもいつもと品質は変わらない。この輸送航海に随伴するに、十分な数と練度の艦娘が配備されていた。いつか店で味わった人形と同じ顔をした少女たち。浩然たちはその可憐な姿に口笛を吹きながら航海を楽しんでいた。

しかし運の悪さというのは、いかなる例外も招き得るものだ。

先程、浩然が目にした人型の鬼。あれは通常の海域、――妖精航路（フェアリーノーツ）と呼ばれる、神託によって比較的他所よりも、高い安全性を保障されたこのエリアにおいては決して出現し得ない、怪物の中でも上位階級（ボスクラス）の存在だった。

それが突然、輸送船団の進路上に立ちふさがるように出現した。そこからは、阿鼻叫喚の地獄だった。

船団護衛の艦娘たちの準備した武装と練度では、あの鬼の前では囮になるのがやっとだった。救援の通信を放ち、時間を出来る限り稼いで、そうして一隻、ま

た一隻と沈められていく艦娘たち。浩然たちは乗組員はその有様を前に、彼らの稼いだ時間を費やし、船を全力航行で走らせながら震え上がることしかできなかった。

護衛が潰えた今、輸送船が被弾して爆発炎上するか、あの怪物共に鹵獲され、船ごと海の底へと引きずり込まれるか。その時、生身の人間がどんな目に合わされるのか。――今までオンライン上で好奇心を満たすために摂取してきた、深海棲艦災害に関するルポルタージュ。どこか遠い場所の出来事と思っていたそのおぞましい惨状が、ついに自身の身に降りかかる。その恐ろしい想像に、浩然は腹を下すような吐き気を感じ続けた。

だが、救いは訪れた。

「……、……っ」

齧りつくように手すりにしがみつき続ける浩然。その視界の中では、先ほどの少女が遠い波間の間、あの怪物の群れに立ち向かっていくところだった。少女に先行して二隻、三隻、四隻と、その仲間たちが群れに突入するのが見える。

練度不足だった船団護衛とはものが違う動き。さらに、今まで目にしたことがない、あの規格外の身体能力。

踊るように、舞うように。海の上を滑りながら、少女たちは怪物を沈めていく。

それはまるでフィギュアスケートの演目だ。

水平線上で披露される、妖精と獣のダンス。

それこそが、彼らが可憐な少女の姿をしている意味とさえ感じる、幻想的光景。

「人形だなんて、とんでもねえ」

彼は自身がこの仕事を続ける意義を、目的を、今一度見つめ直す。ただリスク

を負い続けるだけだと思っていた賭け。いつかツケを盛大に支払う時が来る。挑み続ける限り、死ぬことが確定しているロシアンルーレット。

だが、こちらにもまだ上乗せ(レイズ)できる物はあった。浩然の脳裏に、つい先ほど目にしたばかりの少女の笑顔が浮かぶ。女神と見まごう美しい容姿、猛々しい兵士としての身体能力を持ちながら、それでいて人間的情緒を併せ持った振る舞い。

彼女のハーネスに見えたロゴタイプ。

山吹色の錨とともに刻まれた『横須賀鎮守府所属・第十六駆逐隊』の文字。

「……賭け金(ベット)に値する、運命の女神様(ルーレットゴッデス)だ」

彼のこれからの投資先。それをしっかりと頭に刻み込み、浩然はそう呟いた。

＊

昏い海の波間を、白い軌跡が切り裂いている。

数えること三本。それは海原を滑走する三隻の船の航跡だ。ただし、船といってもそれは、あらゆるボートよりも小さく、それでいて、いかなる艦船よりも力強く自在に波間をすり抜けていくものだ。

それは世界で最も小さな船舶。海上移送手段の最小単位。水面滑走機構（レイノルズ）を装着し、過日の戦闘艦艇を象りし個人艦艇兵装（パーソナルリギングウェポン）、《艤装》を背負うことが許された生体型自律機械。

打ち付ける風と、うねる波の轟音に混じり、獣の咆哮のような音をたてる主機（エンジン）。

艤装から供給される推進力を駆使し、彼らは非生命的環境がもたらす暴威に刃向かい、むしろせせら笑いさえ浮かべて、目的へ向けて奔走する。

その向かう先にあるのは深海棲艦（アビス・ワン）、――彼らの宿敵として位置づけられた埒外の獣。異なる理に根ざした道理に従って、人とその被造物を破壊する害意の群れだ。

群れはまだこちらに気が付いておらず、その注意は、向かって二時の方向を航行する大型液体輸送艦に向けられている。

『間に合ったわね』

滑走する艦船少女の一人である初風は、自身に課せられた任務――大型液体輸送艦護衛遠征の救援部隊として派遣された目的の一つを確認する。

先行して目標地点に向かい、状況を確かめること。そして後続する本隊とともに目標を保護し、積荷・乗組員ともに無事に陸岸へと連れ帰ること。幸いなこと

に、輸送艦は多少の損傷は見えるが未だ健在のようだった。これならば続く後続部隊も、無駄骨になることはなさそうだ。

だが第二優先順位の任務は、果たすことはできなさそうだった。初風は視覚補正装置（フィルタレンズディスプレイ）によって拡張される夜戦用視界の中、目を凝らしながら周囲を索敵する。探すのは、本来この輸送艦に随伴していた護衛船団。その痕跡すらも、水平線上に確認することができない。

みな等しく己の役割に殉じ、水底へと消えていったのか。初風は一瞬目を伏せて、短い黙祷を捧げる。そして再び目を見開くと、青みがかった銀の髪、その下にあるアーモンド型の双眸は、鋭い視線で深海棲艦の群れと、中心に見える鬼の姿を目標としてロックする。

『……やるわよ。全員準備はいいわね』

『天津風は？』
微細資源通信（フェアリースケイル）に載せた初風の内言に、即座の返答があった。ちらりと横目に振り返ると、視界にニヤニヤ笑いが飛び込んでくる。
『時、陣形を崩さないで』
『陣形を崩さないで？』
初風を旗艦とした、夜間突撃の為の複縦陣。だがその短い注意に、戯けた調子で鸚鵡返しするのは、初風のすぐ傍を追走する艦娘だ。
『たった三人だけで複縦もクソもないじゃん。海に三角形描いて矢印かっての。てゆうかまずさっき一人で爆走してった天津風に言いなよそれ』
時津風。黒髪を頭の左右で二房に束ねた、どこか子犬のような印象を与える少女。彼女は初風とは異なり、その背中に主機に類を背負っていない。代わりに腰

のハーネスベルトには、四連装式の魚雷発射管だけが装着されている。だがその身体は、初風と変わらない速度で海原を推進する。そればかりか、くるくると踊るような蛇行滑走をする余裕すら見せる。

初風は眉を顰めながら時津風を睨む。

『舐めてっとまた真っ先に沈むわよこの馬鹿津風』

『やだやだ怖いなーもー』

身体をくねらせながらわざとらしく震え上がるジェスチャ。初風は舌打ちをする。

『通信はさっき繋がったわ。聞いてなかったの？　すぐに戻って合流する。ほんとアンタら、人の話聞かないんだから』

『そ。まあいいけど、このままで手数足りるの？』

『大丈夫ですよ！』

二人の通信に割り込むのは、時津風とは反対側を滑走する艦娘だった。二人が振り返るとその視線を、にこりと前歯をむき出した笑みが出迎える。

雪風。栗毛を肩口でぱさりと切りそろえた、どこかリスのような印象を与える幼い少女。彼女も同じで、その背中に主機を装着していない。代わりにリュックサックのように背負っているのは、やはり四連装式の酸素魚雷発射管。そしてその両腰にはハーネスベルトから釣り下げた馬鹿でかいホルスターがあった。

『最後はあたしが全部沈めますから』

あどけない笑顔のまま、物騒なことを言ってのける雪風。ぴゅう、と下手くそな口笛が傍らで響く。初風がため息をつくと、雪風は変なことを言ったかと首を傾げた。

『そういえばさあ。さっき初風、馬鹿津風って言ったけどさあ』
そこまでのやりとりで気は済んだのか、ふと、陣形を戻しながら時津風がぼやく。
『それさ、あたしと天津風の区別つかなくない？』
『は？　別にいいでしょ』
航行速度を徐々にあげ、主機から伸びる機銃を積載したアームの角度を手で微調整しながら、初風はあしらうように答える。
『どっちも馬鹿に違いないんだから』
『ひっど！』
『二人共、接敵です！　気づかれました！』
眩い青白い光が、三人に向けて照射される。その光線の出処は敵陣の旗艦、鬼が有する探照灯モドキからだ。普通、暗闇で突然強い光を浴びると正常な視力を

一時的にロストする。だが三人は光の直撃を受ける前に、その身を旋回させていた。

特に示し合わせるまでもなく同時に、寸分違わずぴたりとあった呼吸。

ヨコスカ鎮守府が誇る第十六駆逐隊の練度。

『……』

しかしその存在には完全に気づかれた。金切り声とともに、深海棲艦の群れが輸送艦を狙いから外し、一斉に回頭し始める。

艦隊背後からすれ違いざまのT字有利を狙っていたが、流石は鬼の索敵器官というべきか。このままでは反航戦となる。初風は自分たちの手数を計算し、背後の二人へ手を振って指示を出す。彼らは何も言わず彼女を先頭とした陣形、単縦陣に移行する。

『時、アンタ前みたいに遊び過ぎて使い切るんじゃないわよ』

『なにそれ、やれってこと？』
『脳みそ腐ってんの？』
初風は握りこぶしの親指を下にする。背後から飛び跳ねるような水音。
『ひっど、少しはあたしのことも甘やかしてよぉ。天津風にしてるみたいに』
一瞬、初風の思考が止まる。先ほどの天津風との通信が頭を過る。だが、あれは共有通信を切ってから言ったはずだった。
『……はぁ？　私がいつ甘やかしたってのよ』
『あとでうんと褒めてあげるわ』
『余計なとこばっか聞き耳立ててんじゃないッ！』
怒鳴り声で返すと、途端にけたたましいケタケタという笑い声が背後から湧き上がった。

『あ、時津風！』

雪風の驚きの声。初風はケタケタ笑いが自身の背後へ迫り、そしてすぐ横を通過していく姿を目撃する。時津風の頭、その天辺にかぶった煙突型の帽子から白い煙が噴出している。それは彼女の体内の機関が全力での稼働を始めた証拠。

時津風は外装艤装を持たない代わりに、その体内に生体パーツで構築された艤装を内蔵されている。それは八番艦の雪風と九番艦の天津風も同じであり、彼らの方がその先発であり、時津風はその両者の試験のデータを反映された、艤装内蔵型艦娘の最終形態（ハイブリッド）だった。

故に、その推進力は実際、先ほど三人を置き去りにして輸送艦の防護（カバーリング）に駆けつけた天津風にも決して引けをとらず、ましてや一世代前の思想で設計された初風に至っては、その性能差は言うに及ばない。

『この馬鹿津風……ッ！　ああもう』

命令を無視して突出する時津風に、初風はやむを得ず雪風に指示を出し、並んでその背後に付く。そして艤装の準備をする。

艦娘の砲雷撃戦には大抵、お決まりのセオリーが存在する。

まずは索敵フェーズ。

観測機を飛ばし、敵陣の大まかな位置、陣形、構成する艦種を確認する。

ついで航空戦フェーズ。

艦載機を搭載する艦があれば、妖精が搭乗する戦闘機や爆撃機が、空中でのドッグファイトを繰り広げる。海面上の艦娘たちは、艦隊を空爆から守るための対空射撃を行う。

そして雷撃戦フェーズ。

特に雷装に特化した艤装を保有する艦娘は、先制必殺の一撃を放つことができる。

そうしてからの砲撃戦フェーズ。

ここで互いの持てる砲火力を、全力で撃ち合わせる。

その手順（ルール）には多くの場合、高い学習能力故に、こちらの技術や兵装を模倣する性質を持つ深海棲艦も従っていた。それこそが、本来根底とする理が異なるはずの彼らと、この戦争ゲームが成立し得ている理由だった。

今回は索敵はもう済んでいる。そしてお互いに艦載機は搭載しておらず、雷撃に特化した艦もいないようだった。故に、順当に行けば次は砲撃戦フェーズに移行するはずだ。

尤も、それはセオリーに準ずるような面子であればの話だ。

『総員散開。目標は敵旗艦の推定《鬼》。どんな手を使ってでも、後続部隊への道を拓くわよ』

『了解です！』『アイアイ！』

雪風と時津風は返事とともに、それぞれ思い思いの進路をとる。自身が活躍できる最適の位置取りへ。初風も陣形の解除とともに、機関出力を上げて加速する。

――結局こうなると、初風は溜息をついた。

だが仕方なかった。自身が今まで学び、積み上げてきた戦術的知識と技術の全てを脳の片隅へ押しやって、初風は背中の主機から展開していた艤装を全て収納する。そしてアタッチメントから取り外した一〇糎高角砲をその手に握る。

水平線にずらりと並ぶ、深海棲艦。その数、視認できるだけで十数隻。

鬼を旗艦とし、無数の駆逐艦と軽巡洋艦によって構成された水雷戦隊。

自分たちにとっては恐るるに足らないが、決して油断はできない相手。

『行くよぉ！』

時津風は舌舐めずりをしながら、全く無防備にその中に飛び込んでいく。

『――』

その突撃に最初に応じたのは、最前列に並ぶ三隻の駆逐艦だった。身体から青白い燐光を放つ、後期型の使い捨ての尖兵。その昆虫のような無機質な三対の眼球が、真正面から向かってくる愚かな標的をロックオンし、横並びに一斉に砲撃する。

途切れない連続の砲撃音。迫る弾幕を前に、時津風は腰元の砲塔を構えず、代わりにまるで降参するかのように両手を上げる。

そしてステップ。

砲弾の一つが時津風の耳元を掠める。当たらない。
『くひっ』
砲弾が時津風の脇腹を掠める。当たらない。
砲弾が太腿を掠める。当たらない。
向こう脛を掠める。当たらない。
脇の下を掠める。当たらない。
胸を掠める。当たらない。
掠める。当たらない。
当たらない。
『くひひっ』
砲弾は、全く当たらない。

その間に、時津風は弾幕をくぐり抜けて接敵する。肉薄する。いつの間にか駆逐艦の目と鼻の先に至る。至近距離からの砲撃に、着弾誤差の修正などは不要。それでも当たらない。むしろ外れた弾は時津風を挟んで逆サイド、別の駆逐艦の元へ飛び込み、少なくない数が同士討ちで撃沈する。

そうして目の前で火を噴く五吋(インチ)連装砲を前に、彼女は手足を振り回し腰をくねらせ胸を反らして少しも速度を緩めずにくるりと旋回。デタラメな航行軌道で休み無しのダンスを踊る。砲弾はまるで彼女の身体を模(かたど)るようにその輪郭を掠めるだけだ。

ただそれは実のところ、決して完全な回避ではなかった。

『くふっ』

掠める砲弾は必ず、ほんの少しだけ時津風の衣服や肌の一部分を削り取ってい

た。その擦過傷は徐々に数を増し、滲み出した血液が彼女が身体を踊らせる度に、吹き出す汗と混ざり振り撒かれる。

いつの間にかその頭の煙突帽子からは、ひっきりなしに大量の蒸気が吹き出している。それは彼女の精神と身体が、綱渡りのようなぎりぎりのところで、その回避行動を実現し続けていることを知らしめる。

陽炎型駆逐艦一〇番艦・時津風（ザ・ナインライヴス）。

彼女が背負う、過日の戦闘艦艇の記録――敵艦載機の爆撃を受け、心臓と腸（はらわた）を吹き飛ばされて根刮ぎ海に散らした後、その船は鹵獲による機密情報漏洩を防ぐ為、味方の撃沈処分の対象となった。

だが味方からの攻撃は、彼（か）の船に一発も命中しなかった。その数、繰り返すこと九度。最終的に息の根を止めた一〇発目は、再びの敵艦載機からの攻撃だった。

直撃を受けた船は、糸の切れた操り人形のように静かに海の底へと沈んでいった。

その名を受け継ぐ艦船少女。命知らずの時津風（ナインライヴス）。

その役割は、常軌を逸した捨て身の囮（デコイ）。

彼女の決死のダンスを見つめる観客はおらず、けれども彼女を嬲り、生命を脅かそうと襲いかかるものは絶えず。絶え間ない害意の中を、時津風は気ままに振る舞う猫（ナインライヴス）のようにその靭やかな身体を撓らせながら、海面に突き立てたつま先（ポワント）の先から、広げた両手の指の先に至るまで、まるで風にそよぐ葦のように受け流す。

その左手の薬指には、キラリと輝く銀色のリング。

側面には刻印、アルファベットが三つ、数字が一つ。

《TES10》、――それは〈力〉を意味する文字。

その意味不明な妄動に、低級の深海棲艦たちは気を取られて混乱を来し、その戦術思考パターンに齟齬が生じる。

彼らよりも高度な思考パターンを持つ鬼は、煩わしそうに左腕の砲門を緩慢な動きで構え、時津風を狙い撃つ。だがその砲を突如横殴りの衝撃が襲う。直後の砲撃は時津風を外し背後の闇に消える。

それは砲門を狙った援護射撃(スナイプ)だった。鬼が睨みつける先、時津風が引き起こした混乱に、宵闇と波間に隠れながら乗じた者。

『では、沈めます！』

砲撃もしない。逃げもしない。まるでセオリーを無視して飛び込んできた相手。

微細資源通信越しの宣言と同時に再び砲撃音。二つ。短い断末魔の悲鳴が上がり、鬼を取り囲む駆逐艦の一隻が、肉片と緑青色の体液を撒き散らす。

『次です！』

砲撃。再び断末魔があがり、その隣の駆逐艦が撃沈する。

『次です！』

砲撃。断末魔。その繰り返し。正確無比の砲撃は、まるで誘導射撃(ホーミングショット)のように一発足りとも外さずに、標的を文字通り一撃必殺(スナイプ)する。

『いい調子ね、雪(ゆき)』

『はい！』

笑顔が目に浮かぶ陽気な返答。シャコンという小気味良い音が響く。

それは撃ち放たれた砲弾の薬莢が排出される音。時津風や初風から少し離れた

場所で大回りに旋回する雪風が、その両手に一つずつ構えた短機関銃に似た形状の砲。その弾倉からぼとぼとと、海へ金属片が落下する。

その二つの砲に刻まれた文字。

右の砲、――遠からんものは音に聞け！（HELLO EVERYONE LISTEN TO ME!）

左の砲、――近くば寄って目にも見よ！（HELLO EVERYONE LOOK AT ME!）

雪風の未来予知にも等しい狙撃（スナイプ）。それを実現するのは、頭部に装着したヘアバンド型艤装にも接続されている電波探信儀（レーダー）だ。

陽炎型駆逐艦八番艦・雪風（ザ・アイスナイン）。

元の素体の段階で、未訓練の状態での回避性能と、酸素魚雷による致命的一撃（クリティカルヒット）を叩き出す確率の高さから、幸運艦（ラッキィガール）ともてはやされる、艤装内蔵型艦娘の初期型にして完成品（アーリーナンバー）。だが彼女を迎えたヨコスカ鎮守府は幸運（ラストナンバー）に阿（おもね）らず、さら

にその身体に徹底的な改造を加えた。

彼女の頭部には、照準補正（ターゲッティング）や姿勢制御（スタビライザ）の他に、あらゆる動きを感知（センス）する生体艤装が詰め込まれている。その末端素子は身体深層の臓器から、全身の皮膚にも張り巡らされている。いわば彼女自身が電波探信儀（レーダー）であり、感覚器（センサー）であり、一つの広大な微細資源（フェアリースケイル）の複合ネットワークだった。

彼女が得た情報は生体人工脳髄の神経回路網（ニューラルネットワーク）に直結し、コンマ数秒のラグもなく、全身にフィードバックされる。彼女はあらゆる流れをまるで肌で触れるように感じ取り、その動きを掌握（コントロール）する。そうして微細資源の流れを読み取る力を手に入れた彼女は、さらにその流れに干渉する能力すら獲得した。

ぴきり、と金属同士が触れ合うような甲高い音がする。

それは砲弾が命中した鬼の砲門から、――あるいはあたりに浮かぶ駆逐艦の死

骸から、断続的に響いている。急所を撃ち抜き、しかし貫かずに体内に潜り込んだ十二・七糎（センチ）の砲弾。それはただの破壊に留まらず、その真の効果を発揮する。怪物の体表までを一瞬にして侵食し、正体を露わにする。

『……』

不可解を訴える鬼の叫び声。

その砲門と駆逐艦の身体表面のあちこちに、透明な膜が湧き出して広がっていく。そのところどころの結節点では、重なり合った部分が不透明な白色を帯び、たちまち駆逐艦は霜が降りた黒いアスファルトのようなマーブル模様となる。その様はまるで水飴によってコーティングされたりんごのようなコチコチの姿だ。

『仕上げです！』

宣言とともに砲撃音、――連射音。

雨霰のように放たれる砲弾は、寸前で回避行動を試みた鬼を除いて、再び一発必中でコチコチの駆逐艦に命中する。そして粉砕する。

ガラス片の飛び散るような音をたてて、怪物の身体は復元不可能な欠片まで粉々に砕け散る。その一瞬、海上に咲く白い薔薇（アイスバーグ）のような美しい姿を垣間見せる。その砕け散った破片は海に着水すると、咲き乱れる睡蓮のように、さらにその水面を凍てつかせるが、すぐに波に打ち砕かれて水底へと沈んでいく。それは雪風の放った砲弾がもたらした作用の結果だ。

砲弾の中身には、彼女の指先からの干渉を受けた微量の水滴が充填されている。砲撃の熱によって内部で気化した水蒸気には、雪風によって絡繰の種を仕込まれた微細資源が存在する。

今や世界中を循環するあらゆる水に潜むすべての微細資源（フェアリースケイル）に干渉（クラック）し、その動作

を完全に凍結させ、情報を漂白してしまう氷の華。すべての水に常温凝固の秘密を教える門外不出の氷の種。

彼女は、その手で触れる微細資源に溶け込んだ情報の一切を操作し、そのメモリの中身を完全に初期化することができる。その現象は見ての通り、あらゆる物体の熱量を奪い、その動作を完全に停止させる氷として観測される。

それはまさしく、微細資源によってその身を構築された深海棲艦にとっては、天敵とも言える破滅的な力だった。一般的な対深海棲艦・対艦娘に用いられる解体弾とは訳が違う。あれは微細資源の結合を分解する処理がプログラムされた弾薬だが、対して、雪風の一撃必殺による破壊は、微細資源そのものに深刻なダメージを与える。

深海棲艦は彼女の攻撃を受けて逃げ延びようとも、お得意の学習変異をする暇

もない。何故なら奴らがこの場で覚えたことは、この雪風によって植え付けられた氷の種(アイスナイン)によって、全て粉々に無かったことにされるからだ。

ヨコスカ鎮守府は雪風にその力を存分に駆使させる為に、陽炎型十一番艦以降に配備される後期型十二・七糎連装高角砲を二十丈給した。

『連続射撃です！』

宣言とともに、再び連続で火を吹く高角砲。放たれる初期化の氷の種(アイスナイン)。逃げ惑う深海棲艦が次々と凍結され、粉砕されていく。

握りしめるのはあどけない笑顔を浮かべる幼い少女の手。

その左手の薬指には、キラリと輝く銀色のリング。

側面には刻印、アルファベットが三つ、数字が一つ。

《ＴＥＳ８》、――それは〈力〉を意味する文字。

その砲撃の合間に時津風はケタケタ笑いながら高波からのトウループ。混乱する敵陣の中心にたどり着く。同時に、彼女の背中に装着された魚雷発射管が駆動して、酸素魚雷がばらばらと放射状に海面へ放たれる。狙いなど全く考慮せず、酸素魚雷は水中に潜るとただちに推進力を得て発射する。

そのうちの一本を、時津風は落下の途中に摘み取る。

信管の安全装置が外れた魚雷をその手に取り、くるくるとバトンのように回す。

『そおれっ！』

そして前触れ無く投擲。狙いは鬼。ブーメランのように放たれた魚雷はまっすぐに飛んで着水。だがすぐに顔をだす。まるでトビウオのように、または川に水

平に投げ入れられた小石のように。着水と離脱を繰り返しながら、魚雷は水中を潜航する他を超えるスピードで猛然と鬼へと迫る。

『……』

至近距離からの回避不能の雷撃を前に鬼が悲鳴のような声をあげると、射線上に駆逐艦が飛び出し、鬼を防護しようとした。

『そこです！』

だが雪風のスナイプがその目論みを妨害する。魚雷は遮蔽物をくぐり抜け、凍り付いた鬼の左腕装甲に激突し、爆発する。左腕が粉々に砕け散った鬼が怒りの声を上げる。同時に、先に放たれた魚雷が炸裂し、そこかしこで水柱が上がる。時津風の姿が水柱の中に掻き消える。肉片と緑青色の体液を撒き散らし、次々と沈んでいく駆逐艦たち。

そのシャワーの中から再び時津風が顔を出す。

『やべっ』

それは彼女にしては珍しい、焦燥を交えた顔。何事かと目を凝らした初風は、仰天する事実を察知する。――時津風が無造作に放った魚雷のうち一本が、軌跡を描きながら輸送艦へと突き進んでいる。

『この馬鹿ッ！』

このままでは酸素魚雷が輸送艦に激突し、爆発炎上する。あってはならないフレンドリィファイア。自分たちがここまで来た意味が、文字通り海の藻屑と消えてしまう。

だがそうはならなかった。

「――ぅあああッ！」

風と波の中で、はっきりと聞こえた叫び声。

次の瞬間、輸送艦へ向かっていた魚雷は、突然空中へと打ち上げられた。一瞬にして遥か上空へと舞い上がった魚雷は、その衝撃によって信管が起動。

「――……ッ！」

初風が耳を抑えた直後、落雷か花火に似た轟音とともに魚雷は空宙で爆発した。爆風が押しつぶすような瞬間的な下降気流（ダウンバースト）を引き起こす。

『ご、ごめんなさい。戻ったわ！』

微細資源通信上に響く、鈴を転がすような声。その主は輸送艦の方向から、おっかなびっくり肩を竦ませ、銀髪をなびかせながら滑走してきた少女。

陽炎型駆逐艦九番艦・天津風（ザ・ファイアハート）。

まるで爆発反応装甲（リアクティブアーマー）のように、魚雷を水中からまっすぐに蹴り上げた張本人。

時津風や雪風と同じように、その身体に生体艤装を内蔵する艦娘。彼女はその全身の骨格を、通常の艦娘とは異なる強化素材で構成されている。その結果、生体型自律機械の中でも屈指の耐久性能を誇ることとなった。

だが彼女に搭載された生体艤装は、それだけに留まらない。かの大和型戦艦すらも高速化する程の出力を誇る内燃機関・新型高温高圧缶。――それを身体に内蔵された彼女は、供給される膨大なエネルギーでその頑強な身体を思う存分に振り回す。

もはや砲雷撃よりも、蹴り砕いた敵の数の方が多い暴力の申し子。けれど本人は、コミュニケーションの場では必ず言葉に詰まるほどの臆病者で、奥手（リアクティブ）な性格の少女だった。

『天、時に合流して！』

その姿を視認するや否や、初風は素早く指示を出す。
『あいつを摘んで引っ張ってきなさい！』
『は、はい！』
遅れて初風も敵陣の目前まで肉薄する。そして雪風の凶弾を浴びていない駆逐艦を片付けようと砲を構える。だが、突如その眼前に水柱があがる。
『……』
どこか得意気に聞こえる鬼の金切り声。
水柱の中から現れたのは、双つの軌跡を描く、爛々と赫くターコイズブルー。
暴力を体現するかのような黒い籠手型装甲で、その両腕を覆ったモノトーン。
伏兵の登場。重巡洋艦リ級・改が二隻、水中から飛び出し、それぞれ初風と天津風の目の前に立ちはだかる。

初風は思わず舌打ちをする。いくら鬼が驚異的な存在で、護衛の水雷戦隊の練度が足りていなかったとはいえ、あとは取り巻きの軽巡や駆逐艦しかいない程度の敵に、一人も撤退すらできていないのはおかしいと思っていた。

『奇襲攻撃、こいつらにそんな碌でもない戦術学習をさせた愚か者はどこの誰よ』

『初風！』

天津風の悲鳴のような通信の声。自分も同じ敵を目の前にしている癖に、他人優先の彼女の主義に初風は思わず失笑を漏らす。目の前の初風に対して、リ級はその瞼のない眼球で標的の身体を補足。無造作に至近距離からの振り下ろし（バンチング）を放つ。対する初風は咄嗟に砲でその拳から身をかばう。

打撃音。

「――――っ」

ミシミシという衝撃が受け止めた砲を伝って初風の身体へと浸透する。両足の水面滑走機構（レイノルズ）が液体固着作用（ダイラタンシー）によって足場を固め、水中へ沈み込む両足を押し留める。砲が音をたてて破損し、使い物にならなくなって煙をあげる。

『……』

硬直した初風の身体が離脱の行動を起こすよりも早く、リ級が嘲笑うような声を上げ、もう片方の腕を初風の腹へ。六吋連装速射砲の砲門を密着させる。

砲撃音。

——そして、金属音。

「が……っ」

全身がバラバラになりそうな、例えようのないほどの衝撃が腹部へ叩きつけられた。臓腑の中の空気と体液が一瞬にして全て圧縮、初風の喉を通じて口腔から

迸る。顎を伝って入り混じった体液が流れ出す。ダメージに全身の稼働部位が痺れを訴え硬直する。

だがそれだけだ。

異変に気が付いたのか、リ級がその表情筋のない顔面が、どこか当惑するかのような微かな反応を示す。予測（シミュレート）した結果とは違う現象。砲弾の直撃を受けたはずの初風の身体はどこにも欠損した箇所はなく、依然五体満足の状態を保っている。千切れ飛んだのは彼女の腹部を覆う、上半身の衣服だけだった。

その下から見えるのは、黒色の肌。

それはインナーではない。明らかに布地ではない。だが繊維ではある。そして鋼でもある。微細資源の結合によって編み込まれた合金繊維。それこそが初風の皮膚だった。

陽炎型駆逐艦七番艦・初風改。（ザ・ティアンハート）

天津風が内骨格なら、初風のそれは例えるならば外骨格だった。その首から下の身体を、まるごと生体パーツではなく、合金繊維へすげ替えた実験体。それが第十六駆逐隊の中で最も旧式でありながら、旧式であるがゆえに外装型艤装技術の粋を集めた改造を施し、艤装内蔵型艦娘である他三隻に追随し、まとめあげる旗艦（フラッグシップ）の正体だ。

その体は頑丈なだけではなく、生体パーツだけでは実現し得ない強力な耐久性と、内燃機関だけに頼らない機械的膂力（マシンパワー）を発揮する。事実、その両腕は砲撃の衝撃で吹き飛ばされないように六吋連装速射砲の砲門を掴んでいる。

ミシリ、という音がする。

リ級は速射砲を掴む初風の腕を、力任せで無造作に振りほどこうとする。

だが解けない。駆逐艦の五指でホールドされた砲が、重巡洋艦クラスの出力に相当する膂力でびくともしない。そればかりか、その砲の表面に亀裂が入る。その左右合わせて一〇本の黒い手指がリ級の表面装甲を砕き、指先をめり込ませている。

「いいでしょ、この腕」

すまし顔で告げる初風にリ級は当惑も示さず、焦燥も示さず、ただひたすらに振りほどく動作を繰り返し続ける。問題解決（プレーム）の限界を迎えた知能は自身に定義された最適行動を取り続ける。

無反応に初風は舌打ちをする。そしてその隙に、周囲の状況を確認する。

天津風は今まさに、もう一隻のリ級を沈めているところだった。ただし砲撃ではなく、——そもそも最近彼女が砲撃をしているところを見たことがない——彼

女はまたその途方もない出力を載せた蹴り脚で、相手の身体を装甲ごと降り砕いていた。そして海の中へと沈むリ級を無視し、焦燥した表情でこちらへと滑走する。

対して時津風と雪風は既に初風から目を離し、鬼と駆逐艦の相手をしていた。天津風とは違い、彼らは初風を放っておいても問題ないことを分かっている。命知らずの時津風が鬼を挑発し翻弄し、雪風はその間に周囲の駆逐艦を着実に沈めていく。

見れば、大型輸送艦は既に戦域からかなりの距離を空けていた。もう間もなく後続する別働隊が合流する。あちらには重巡洋艦や高速戦艦クラスの艦娘が随伴している。恐らく放って置いても良いだろう。

あとは鬼を沈めるだけ。

状況を把握した初風は、砲を掴んでいた左手を離すと拳を握る。いつの間にか砲撃の衝撃で、陽炎型指定の白手袋が千切れ飛んでいた。

露わになったなめらかな黒い手指。
その薬指には、キラリと輝く銀色のリング。
側面には刻印、アルファベットが三つ、数字が一つ。
《ＴＥＳ７》、――それは〈力〉を意味する文字。

「消えなさい」
言葉とともに放たれる左フック。それはリ級の頭蓋に横殴りに命中し、戦艦の砲撃にも耐え得るその外装骨格を、いとも容易く割り砕いた。
『――、……』
頭部を粉砕されたリ級の身体は、初風が右手を離すとぐらりと力を失い、水飛

沫をあげながら海の中へと沈んでいく。既に初風はそれを見ていない。既に倒した相手をいつまでも見ていても意味がない。

『天、アンタ時の援護に回れっつったでしょ！』

こちらへ無用な心配をして駆け寄ってくる天津風に檄を飛ばす。怒鳴りつけられた彼女が慌てて引き返すのを見届けた初風は、自身も援護に加わるべく、鬼を嘲弄する二隻の元へと滑走を開始した。

（続く）

「妖精機関広報 h38」収録

心造少女３　第３章　第１節

電子書籍版

< SA0203 >

二〇一八年　五月　六日　電子版発行

著者　妹尾　ありか

表紙　児玉酉

サークル　ありや

ウェブサイト　http://imoni.org/

メールアドレス　info@imoni.org

ツイッター　@ariya_

乱丁・落丁本は当サークルまでご連絡下さい。在庫があればお取り替え致します。

KANTAI-COLLECTION-FANBOOK

無許可での複製・転載を禁止致します。